

## 〈翁〉の「天下泰平国土安穩」

宮本圭造

〈翁〉は、能が生まれる遙か以前から演じられてきた古い芸能で、鎌倉初期にはすでに成立していたと見られている。しかしながら、その成立過程についてはなお不明な点が多く、様々な研究者がこの問題に論及しているが、なお真相は闇の中というのが、〈翁〉研究の現状といつて差し支えないであろう。〈翁〉の謎めいた詞章にも意味を十分に取らざらぬ箇所が少なくなく、すでに世阿弥の頃から、「昔より(中略)伝わり来たるものなれば、たやすく書き改むるべからず」として、頑なに守り伝えられ、かつ演じ継がれてきたのであった。

その〈翁〉の上演において、とりわけ印象深いのが、翁面を付けたシテが両手を大きく広げ、「天下泰平国土安穩、今日の御祈禱なり」と莊重に唱える場面であろう。もともと、〈翁〉がその成立当初から「天下泰平国土安穩」を祈願する芸能であったか、という点、必ずしもそうではないらしい。例えば、現在民俗芸能として伝わる兵庫県社町の上鴨川住吉神社秋祭りの「翁」や、奥三河から遠江・信濃にかけての山村で霜月まつりや正月のオコナイともなつて演じられる「翁」は、大和猿楽によつて洗練された現行の〈翁〉が成立する以前の、かなり古風な〈翁〉の芸能を伝えるものと考えられているが、そこでは天下泰平を祈念する言葉が一切ない。代わつて、天竺・唐土・日本の数々の宝物を読み上げる宝数えの賀詞が長々と続き、「所も栄えたり、このや翁も栄えたりと、お祝ひの舞なれば、一舞舞ふて入らふよ」(上鴨川住吉神社の「翁」)、あるいは「ひとまいまおうよ、まんざいらく」(三河古戸の田楽)といった祝言の囃し言葉で締めくくられる。

同じく古風な「翁」の芸能を伝える岐阜県揖斐川町北方春日神社の正月のオコナイの「翁」(現在は演じられていない)では、その締めめの言葉が「一さしまおう万さいら(万歳楽)、天下泰平国土あんおんの只今の御きたふなれば、一さしまおふまんさいら」と、「天下泰平国土安穩」の文句を含む形になっているが、これも大和猿楽系の〈翁〉や、畿内郷村の諸社で行われた「願の翁」「添え翁」(「一舞舞おう万歳楽」の後、「これも当社に立て給う願なれば・・・」という願立ての文句が唱えられ、「一舞舞おう万歳楽」が繰り返される)の影響を受けた後代の改変と見るべきであつて、本来はやはり三信遠の祭りの「翁」などと同じく、「天下泰平国土安穩」の語を欠く形であつたらう。では「翁」が現行のように「天下泰平国土安穩」を祈願する芸能へと変化したのは、いつ頃のことなのであるか。これについては全く不明とせざるを得ないが、鎌倉室町期のある時期に、「翁」を「天下泰平」を寿ぐ芸能へと昇華させる、意図的な改変がなされた可能性が高いのではないかと私は見ている。平泉毛越寺の常行堂修正会で行われる「祝詞」は、翁面をつけた僧侶が摩多羅神の御前で秘文をつぶやくように唱えるという、「翁」成立以前の姿を彷彿させる神秘的な芸能であるが、その秘文の中でも、「御願円満、息災延命、千秋万歳」などの願文が唱えられるのみで、「天下泰平国土安穩」の語は聞かれない。また、大和猿楽系の「翁」でも、郷村諸社の神事祭祀に行われる場合には、「願の翁」「添え翁」などといつて、通常の翁舞に添える形で、願主の願立ての文句が読み上げられ、短い舞を繰り返すという演出がとられるが、その願立ての文句は「敬白神陳、願主心中大願、家内長久安全、五穀成就、是悦之神樂祝詞神慮へ捧申さん」とか、「祈らば祈れ、神や守らんと御誓は、天地長久御願円万、子孫繁栄延命寿」(金春座年預幸王家文書)とかいったように、世俗的な願ひ事が中心であつた。これなども、「翁」という芸能の本来の性格を物語るものと捉えることが出来よう。ところが、現行の〈翁〉はそうした世俗的な願立てとは明ら

かに一線を画し、「天下泰平国土安穩」という  
壮大なスケールの願文を唱えることに主眼を  
置くのである。

二〇一一年の法政大学能楽セミナーで、中  
国古典演劇研究の第一人者、田仲一成氏が「日  
本の式三番・鬼能に当たる芸態は中国にかっ  
て存在したか」と題する特別講演を行ったが、  
その際の氏の発言は、この「天下泰平国土安  
穩」の願文の性格を考える上で、実に示唆的  
であった。すなわち田仲氏によれば、追儼か  
ら発展した中国の仮面劇「儺戯」にも、能の  
〈翁〉と同様に翁面をつけた招福の神が登場す  
るが、その「翁」が「天下泰平国土安穩」の祝詞  
を唱えることは一切ないのだという。そもそ  
も、中国において「天下泰平」を祈願すること  
が出来るのは、唯一にして絶対権力者たる皇  
帝のみであり、一介の芸能者が「天下泰平」を  
祈願するのは、皇帝の領域を犯す反逆罪の行  
為とみなされるのであって、「儺戯」に登場す  
る「翁」も、町の駐在さんのように、ある特定  
地域の安泰を願う存在に過ぎない。一方、能  
の〈翁〉は国家的な祈願を芸能者が行う点に大  
きな特徴がある、ということであった。

田仲氏の言われるように、〈翁〉の「天下泰  
平国土安穩」は、確かに国家祭祀としての側  
面を示している。そうした点に留意するなら

ば、〈翁〉を舞うのに真に相応しい人物は、日  
本国土を支配する最高権力者であるというこ  
とになるだろうか。もともと、能の歴史を紐解い  
てみても、室町〜江戸前期を通じて最高権  
力者が〈翁〉を舞った例は一つも見当たらない。

戦国〜桃山期には多くの大名が自ら能を舞い、  
中でも天下統一を果たした豊臣秀吉が日々、  
能に明け暮れたことは有名だが、その秀吉が  
主催した文禄二年（一五九三）十月の禁裏能で  
は、三日間とも秀吉が脇能のシテを勤めたも  
のの、初日・二日目の〈翁〉は暮松新九郎、三  
日目の〈翁〉は金春大夫安照が舞っており、秀  
吉が〈翁〉を勤めることはなかった。観世流の  
能を嗜み、十六世紀末にいくつかの演能記録  
を残している徳川家康も、〈翁〉を舞った記録  
は一切残されていない。下って、江戸初期の  
寛永十二年（一六三五）から寛永十四年にか  
けて、江戸城二之丸あるいは西之丸で催された  
素人の慰み能において旗本の内田平左衛門や  
本多美作守が〈翁〉を舞った例があるにはある  
が、これらはいずれも、素人能を好んだ三代  
將軍家光を楽しませるために、全ての演目を  
素人の旗本・大名衆らだけで演じた異例の催  
しでの出来事であり、当時の將軍や大名は能  
を舞うことはあっても、〈翁〉を舞う機会はほ  
んどなかった、と見て差し支えないであろ  
う。〈翁〉はあくまで儀式的な演目であり、能  
を芸事として楽しむ大名たちにとつて、さし  
て魅力的なものとは映らなかつたのかも知れ  
ない。

ところが、そのような慣例が五代將軍綱吉  
の代に打ち破られることになる。綱吉もまた  
秀吉同様、能に深く耽溺したことで知られ、  
延宝八年（一六八〇）に五代將軍に就任して以  
降、度々江戸城二之丸や本丸奥で能を自ら舞  
っているが、貞享四年（一六八七）までの七年

間で綱吉が舞ったのは〈舟弁慶〉〈邯鄲〉〈道  
成寺〉などの能ばかりで、〈翁〉を舞った例は  
皆目見当たらない。しかし、貞享五年（元禄  
元年）三月十二日にまず江戸城本丸奥で〈翁〉  
〈白髭〉〈通盛〉〈小鍛冶〉を舞い、その翌日の  
三月十三日にも、京都から下向してきた公  
家衆を饗応するための御能で、〈翁〉〈高砂〉  
〈橋弁慶〉を綱吉が舞っているのである（『徳川  
実紀』）。十二日は本丸奥での非公式の催しで、  
その日演じられた〈翁〉は翌日の予行演習を兼  
ねていたであろうが、十三日は、『徳川実紀』  
に「公卿まうのぼり御能を拝覧し饗給ふ。普  
第の輩。鷹間詰。高家。留守居。三番頭。町  
奉行。勘定頭。作事奉行。普請奉行。新番頭。  
小十人。徒の頭。并にありあふ布衣以上の輩  
みな見ることをゆるさる」とあるように、公  
家衆のみならず大勢の家臣が参列しての大規  
模な催しで、場所は明記されていないものの、  
江戸城で最も格式の高い、本丸御殿大広間に  
面した表舞台で執り行われた可能性が高いと  
考えられる。

これに先立ち、三月十一日、綱吉は側用人  
の牧野成貞を公家衆の宿所に遣わし、「去年  
御即位の後、主上、両上皇宸儀平らかにわ  
たらせ給ひ、よろこびおほし召るるにより、  
その御祝とて、御みづから猿樂御所作あるべ  
ければ、公卿みなまうのぼり、拝覧あるべき  
御旨」を伝えさせている。つまり、この度の  
催しには靈元天皇から東山天皇への代替わり  
に対する祝意が込められていたわけだが、そ  
のような場で、先例を破り、綱吉が自ら〈翁〉

を舞っているのは、他でもなく〈翁〉の「天下泰平国土安穩」という祝詞に合わせ、最高権力者たる綱吉が天下の泰平を祈念するという意味合いがあったのであろう。これ以降、綱吉はしばしば江戸城で〈翁〉を舞っている。そこに、「礼樂をもて天下を風紀する」(『徳川実紀』常憲院殿御実紀附録下)という、礼樂思想に基づく国家統治という綱吉の政治プランを読み取ることも可能なのではなからうか。

興味深いのは、綱吉が江戸城で〈翁〉を舞い始めた貞享五年(元禄元年)以降、全国の大名がこれに追随するかのようになり、〈翁〉の相伝を受けている点である。法政大学鴻山文庫に、金沢藩主前田綱紀が元禄年中に宝生大夫から相伝された一群の翁伝書が所蔵されるほか、神道吉田家が「翁大事」の秘伝を相伝した人物のリスト『翁大事御相伝人数書』にも、元禄九年の前田利直(大聖寺藩)を皮切りに、宝永二年(一七〇五)の藤堂大学頭(津藩)、宝永三年の岡部長泰(岸和田藩)、宝永三年の毛利元倚(萩藩)、宝永八年の黒田直重(下館藩)など、多くの大名の名が見られるようになる。

江戸後期から幕末になると、将軍・大名が自ら〈翁〉を舞った記録はさらに頻出するが、それはあたかも、政治の表舞台における将軍・藩主の存在感が急速に低下していったことの反作用のように思えてならない。彼らはもはや政治の場ではなく、能舞台において領内の安泰を祈念するほかなかったのである。

(法政大学教授)